

《奥の細道》の旅

## 出羽三山と象潟～鶴岡から山のふもとへバスは向い…

アグニエシカ・ジュワフスカ梅田

題句

けふはかり人も年よれ初時雨 芭蕉  
 (五吟歌仙の立句、赤坂・彦根藩邸にて、元禄 5  
 (1692)年 10 月 3 日)  
 第二句には弟子の森川許六(きょりく、1656-  
 1715)が参加している。  
 野は仕付たる麥のあら土 許六  
 (『許六全集』、東京:博文館、1898、15 ページ)

2016年8月、台風の湿気と暑さが数日おきに日本を総なめにしました。でも、しばしば孤独な放浪のときには、それは多くの満足をもたらします。それは自然や、歴史という時間の経過の痕跡や、自分の弱さ、老齡、自分自身と神の発見に結びついていきます。台風の雨、狭くて食事のつかない旅館といった旅の不便さや、同じような旅人との出会いはとても貴重な経験でした。

鶴岡(山形県)から羽黒山のふもとへとバスは向います。山全体が神社で、その入り口に随神門があります。低い門が鬱蒼とした杉の木々に囲まれ、道を外れれば静寂に浸ることができます。最近によく熊や猪が出るため、観光客は多くありません。怖い、怖い。そこから出羽三山の他の二山、月山と湯殿山へ道が通じています。出羽三山は山伏の重要な巡礼地です。山伏とは、生命力や、大地と自然との精神的な絆を見いだす修験者です。

羽黒山の頂上からバスで月山の八合目まで到達できます。そこには弥陀ヶ原という、樹木のない、大小さまざまな池と高山植物の花でいっぱいの高原が広がっています。緑濃い草原にウグイスの「ホーホケキョ」(法、法華経)というさえずりが聞こえ、高山地帯に薄い霧がたなびき、創造主の手の完全な豊かさが開けています。私は白く濁った霧に包まれている駐車場まで降りて行き、間もなく午後 4 時の最終バスが出ます。帰りは路肩の崩れかけた崖



の間をいく危険な道で、バスの運転手はカーブではアクセルを離し、直線ではリズムよくスピードを出して神業のように運転します。



Agnieszka Żuławska-Umeda

ポーランドにおける日本語教育の草分け梅田良忠(1900-61)教授の長男で社会活動家の芳穂(1949-2012)の妻。1973年ワルシャワ大学卒、1987年から同大学東洋学部日本学科講師、2004年文学博士。著書『1684-1694年代の蕉門の詩学』(2008)、訳書『俳句』(1983)、松尾芭蕉『笈の小文』(1994)などのほか論文多数。2016年9月に退職後もポーランドの「葛」句会及び、芭蕉の紀行文や『枕草子』の翻訳と日本詩文の研究を継続。

「出羽三山(六月)八日、月山に登る。木綿(ゆう)しめを身に引き掛け、宝冠で頭を包み、強力(ごうりき)という者に案内されて、雲や霧のたちこめる山気の中を、氷雪を踏んで登ること八里、身はさながら日月の運行する雲の間にはいつて行くかと怪しまれ、息も絶えだえに身もごこえきって、ようやく頂上に達すると、おりから日は沈み月が現れた。山小屋に笹を敷き篠(しの)を枕(まくら)として、横になって夜の明けるのを待つ。

涼しさやほの三日月(みかづき)の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山

(松尾芭蕉『おくのほそ道』現代語訳、穎原退蔵、尾形仿訳注、角川ソフィア文庫、2003、120-121 ページ)

秋田・国際教養大学の森久子夫妻の車で象潟の町に向くと、奈曾川にかかる橋を渡らねばなりません。駅の正面玄関の前に芭蕉記念碑が建っていて、芭蕉が泊まった蚶満寺(干満珠寺)が見えます。文化元(1804)年の大地震以前は、小富士として知られる鳥海山の北西山麓の地域全体が海でした! 絵のように美しい九十九島は松島の風景に似て、島には円仁(慈覚大師、794-864)の開創と伝えられる蚶満寺が建っています。象潟は放浪の詩人たちの目指した地、西行法師(1118-90)や俳人芭蕉(1644-94)、後には世界への感度満点の俳句の巨匠、小林一茶(1763-1824)らが魅了された場所です。今、昔の島の周りには稲田の海が広がり、昔と同じく松



の木が生い茂った島が田んぼの上に過去を封印して突き出ています。この場所の精神について、芭蕉の言葉は予言のように聞こえます—巨大地震と苦しみの方が大地と人に触れ、人々は死に、山は崩れ、大地は広がり、この奇妙な象の入り江のように、すべてを、海さえも飲み込む……

「象潟 これまで山水海陸の美景のある限りをことごとく見集めてきて、今や象潟(きさがた)に対して詩心を苦しめ悩ます次第となった。酒田の港から東北の方へ、山を越え、磯を伝い、砂浜を踏んで、その間十里、日もようやく傾きかけるころ、着いて見ると、汐風が砂を吹き上げ、雨は朦朧(もうろう)とうちけぶって、鳥海の山も隠れてしまっている。古詩に詠ずるごとく、暗やみの中を手さぐりをするようにして透かし見る眼前の雨中の夜景も「雨もまた奇なり」の詩句の通り、こんなにもすばらしいとすれば、さらに雨の晴れたあとの「晴れて偏(ひと)へに好し」というけしきはどんなにめざましかろうと期待をかけて、わずかに膝(ひざ)を入れるばかりの小さな漁師のあばら屋に宿って、雨のあがるのを待つ。

その翌朝、天気はからりと晴れあがって、朝日ははなやかにさし出るところ、象潟に舟を浮かべた。まっ先に能因島(のういんじま)に舟を漕ぎ寄せて、能因法師が三年間隠栖(いんせい)した遺跡を尋ね、向こうの岸に舟をあがると、「花の上漕ぐ海士(あま)の釣舟(つりぶね)」とおよみになった桜の老木が、今もそのまま西行法師の記念を残している。水辺に御陵があり、神功(じんぐう)

皇后の御墓という。また、この寺を干満珠寺といっている。だが、ここに皇后が行幸された



ことは、まだ聞いたことがない。どういいうわれのあることだろうか。この寺の表座敷に坐ってすだれを巻き上げてながめると、象潟の風景はことごとく一望のうちに見わたされ、南には鳥海山が天を支えるかのごとく高くそびえ立ち、その影が映って水上に横たわっている。西はむやむやの関が道をさえぎってその先は見えず、東には堤を築いて秋田に通う道がはるかに続いており、海を北にひかえて外海の波が潟にうち入る所を汐越と呼んでいる。入江の縦横各一里ばかり、そのおもざしは松島に似通っていて、しかしまた違ったところがある。いわば松島は笑っているような明るさがあり、象潟は憂いに沈んでいるかのような感じだ。さらにいえば、寂しさの上に悲しみの感を加えて、その地のたたずまいは傷心の美女の俤(おもかげ)に似ている。

象潟や雨に西施(せいし)がねぶの花  
汐越や鶴脛(つるはぎ)ぬれて海涼し  
(『おくのほそ道』125-126 ページ) (訳 安藤厚)

写真 1 羽黒山随神門 (羽黒町観光協会 HP より)

写真 2 月山弥陀ヶ原湿原 (photo: Kagioka Ryumon)

写真 3 象潟 稲田の海に浮かぶ松の木が生い茂った島

### ワイダ監督と猿八座

佐渡島からやって来た文弥人形の猿八座に翻訳と通訳を頼まれた 2004 年のこと。ポズナンとヴァウブジフに続き、クラクフの日本美術技術センター“マンガ”で『信太妻』の公演が行われた際に、ワイダ監督と出会うことができました。僅かな間でしたが、十一月の寒い日に監督も交えて一座の皆と温かい一時を過ごせたことは、貴重な思い出となりました。

polskie zaduszki  
słyszeć szepty modlitwy  
ktoś gra na trąbce  
Monika Tsuda, Poznań

ささやきと  
トランペットの  
祈る墓地  
ポズナン市、津田モニカ

w gaju nad rzeką  
jeź poranek ogląda  
spod złotych liści

黄葉の  
朝を見回る  
針鼠

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ



### ポーランド&ニッポン歳時記



冬うららプレゼントはジョーカーか  
無一物ともいかず冬用意かな  
ビビビと増毛の海の鎌鼬  
鎌鼬(カマイタチ。寒風などにあたって皮膚が鎌で切られた様に傷つくことをいう。冬の季語)

岩見沢市、霜田千代磨